Heart Beauty Salon

サトリのココロ

［月1連載］

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
修行僧に聞く、弱い自分と向き合う方法――

今日の私があるのは御巣鷹山の慰霊のおかげ

日蓮宗高明寺住職 **坂手善正**さん

第4回

さかて・ぜんしょう　昭和8年生まれ。昭和20年、小学校を卒業すると同時に日蓮宗総本山・身延山久遠寺で修行に入り、84世法主・深見日円猊下（げいか）の膝下（しっか）に直参。8か年、朝暮の薫陶（くんとう）を受ける。そこで給仕の何たるかを習う。修行の後、立正大学入学。1985年8月12日の日航機墜落事故以来、毎年御巣鷹山に慰霊登山を行い、その姿がテレビなどでも取り上げられる。心窓山高明寺（長野県南佐久郡佐久穂町）住職。

1985年8月12日、その日、仕事で東京から長野に帰る信越線の車中、窓からはるか東南方に旋回する飛行機が見えた。そしてほどなくして、稜線（りょうせん）に機影が消えたのです。それが御巣鷹山の日本航空123便墜落、520名もの尊い命が奪われた事故でした。

翌朝、私の寺に長野県警の本部から電話がありました。「墜落事故の仏様を収容してもらえないか」との要請でした。そのときはまだ事故現場が特定されておらず、現場は長野県側と想定されていた。

「これは大変なことになる」と私は想った。しかしその後、墜落現場は群馬県上野村であることが判明。その連絡を受けたとき私は、あろうことか「（長野ではなく）助かった。明日から田舎の盆だ」と思ったのです。

亡くなった方々に詫びたい……その思いで始めた慰霊

520名もの方が、むなしく亡くなられた事故です。それなのに私は、自分が「助かった」と。そんな自分を恥じ、亡くなった魂にお詫びをしなければいけない……そう思った私はその日から、「散華（さんげ）」という花びらのような小さな紙に写経を始めました。そしてその写経を、ヘリコプターで事故現場に撒いてもらったのです。

誰に見られずとも、そうせずにはいられなかった。しかし、実際は大勢の人が、空から写経が降る様を見て、手を合わせてくれたそうです。

これが私の御巣鷹慰霊の始まりでした。その後は毎年、8月12日を含めて年2～3回は御巣鷹山に登り、慰霊を続けました。団扇太鼓（うちわだいこ）を鳴らしながらお題目を唱え、山を登ります。山の麓には「慰霊の園」があり、ここはいつも天気がいいのですが、山頂でお経を読むと必ず雨が降るのです。「520の涙雨」と言われました。ある日突然に人生を終えなければならなかった520名の涙でしょう。私はそんな仏様たちをなんとか喜ばせたい、心で、お経を読み続けました。

慰霊とは「慰め」です。死者の魂を慰めるのが私の務め。一生懸命に手を合わせ、お経を唱え、供養してあげるだけです。上の空で読経しても、仏様には伝わらないし、届きません。仏様の心に寄り添って初めて、真の供養となるのです。

今年も御巣鷹山で仏様が待ってくれています

日蓮聖人は論された。「信ずるは易し、保つは難し」。保つ、つまり継続することが大切なのだと。今日の私があるのは、46年間の海外戦跡慰霊巡拝、そして御巣鷹山の慰霊登山のおかげなのだと。事故から25年の時を経た今も、強く思う。

佛心とは、慈と悲となり
大慈はすなわち楽を与え
大悲はすなわち苦を抜く
抜苦は軽重を問う事なく
与楽は遠近（おんごん）、親疎（しんそ）を論ぜず

観音経にある悲観及慈観（ひかんぎゅうじかん）という教えです。私の一代はこの語への接近にある。

今年ももうすぐ8月12日が巡ってきます。私は近年膝を痛めてしまい、慰霊登山をすることはむずかしくなりましたが、仏様が待っていてくれるかと思うと山に向かいたくなるのです。

撮影／光川十洋　取材・文／本木頼子　デザイン／黒田志麻